

春季のタバココナジラミバイオタイプ Q の発生源

タバココナジラミバイオタイプ Q の成虫は、野外で越冬できない。卵・幼虫は越冬可能であるが、その割合は 1% 未満と低い。ハウス内に生息するバイオタイプ Q は、気温の上昇にともない急速に密度が高まり、ハウスの周辺へ分散する。したがって、バイオタイプ Q の主な越冬場所および春季の発生源はハウスである。

農業研究センター 生産環境研究所 病害虫研究室 (担当者: 樋口聡志)

研究のねらい

害虫の防除対策を考える上で、越冬場所や発生源を明らかにすることは重要である。しかし、2004 年に初確認されたタバココナジラミバイオタイプ Q の越冬場所と春季の発生源は不明である。そこで、防除対策の基礎資料とするために、越冬場所と春季の発生源を明らかにする。

研究の成果

1. 雨よけハウス内でも、成虫は越冬できない (図 1)。
2. 卵・幼虫は野外越冬できるが、その生存率は 0.7% と低い (表 1)。
3. 3 月以降、施設果菜類でのバイオタイプ Q は、成虫および幼虫の密度が増加し、ハウス内から野外に移出する (図 2)。
4. バイオタイプ Q が寄生する雑草で越冬するものは、種類数、量ともに少ない。

普及上の留意点

1. これまでのタバココナジラミに対する防除対策を変更する必要はない。
2. 栽培終了時のハウス密閉処理は、必ず実施する。
3. 冬季のトマト黄化葉巻およびウリ類退緑黄化ウイルスの伝染環としては、ハウス内で栽培されている寄主作物である。
4. 12~2 月の日最低平均気温は、2007-08 年の雨よけ内で 1.2 (最高 12.2~最低 -6.5)、2008-09 年の野外で 0.0 (最高 10.9~最低 -6.7) であった。

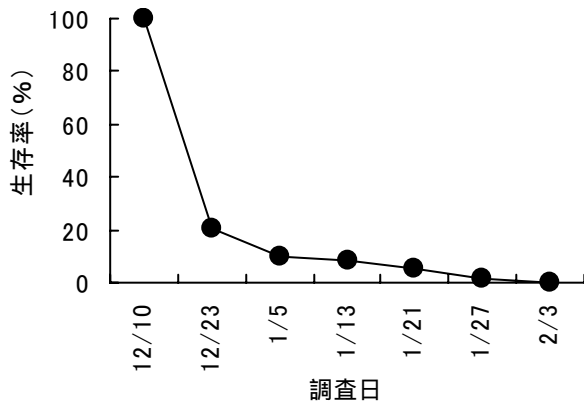


図1 雨よけハウス内でのタバココナジラミバイオタイプQ成虫の生存率推移

2007年12月10日に、成虫300頭とキャベツ苗をケージに入れ、熊本県農業研究センター内の雨よけハウス内で管理した。

表1 野外のキランソウにおけるタバココナジラミバイオタイプQのステージ別寄生数および生存率推移

調査日	野外設置後日数	卵	若齢	中齢	老齢	羽化成虫	合計	生存率 (%)
2008/12/27	31	165	118	12	5	-	300	100
2009/2/23	89	13	8	3	0	-	24	8.0
2009/3/20	114	0	2	1	1	-	4	1.3
2009/4/1	126	0	2	1	1	-	4	1.3
2009/4/25	-	0	0	0	0	2	2	0.7

試験場所は、熊本県農業研究センター(合志市)である。

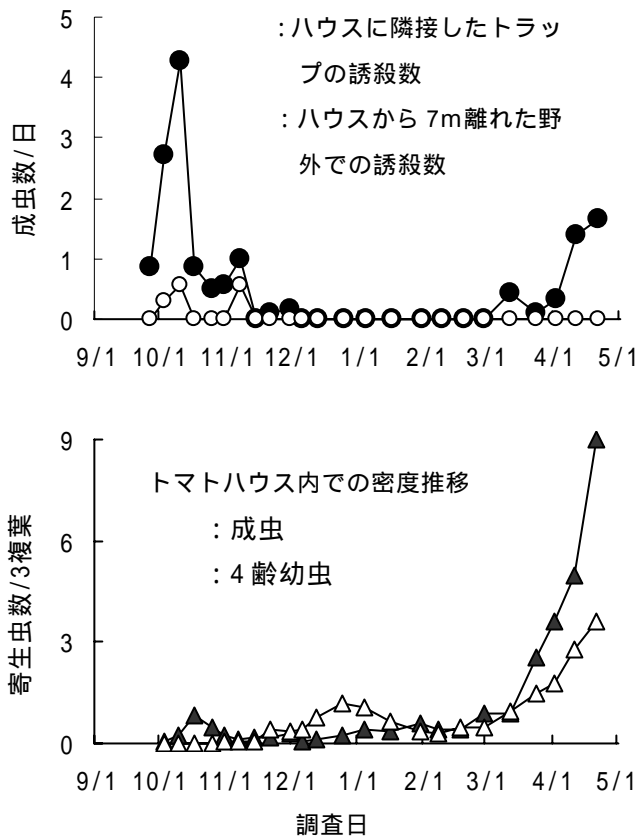


図2 トマトハウス周辺に設置した黄色粘着トラップでの誘殺数(上)とトマトでのタバココナジラミバイオタイプQの密度推移(下) 【2007-08年】

寄生密度を調査した熊本県農業研究センター内のトマトハウス周辺に黄色粘着トラップを設置した。成虫の誘殺数の値は、4枚の黄色粘着トラップ(10×10cm)の合計値である。